

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年9月2日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科・生物化学専攻

職 名・学 年 博士課程2年

氏 名 若 森 参

助 成 の 種 類	平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第34回国際動物行動学会議 2015年大会 Behaviour 2015		
発 表 題 目	Tails of Macaques: similar length but different movement? Focusing on Rhesus (<i>Macaca mulatta</i>), Northern pig-tailed (<i>M. leonina</i>) and Assamese (<i>M. assamensis</i>)		
開 催 場 所	オーストラリアクイーンズランド州ケアンズ、Cairns Convention Center		
渡 航 期 間	平成27年 8月 8日 ~ 平成27年 8月15日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	250,000 円	
	使用した助成金額	250,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空券	122,250 円
		学会参加費	32,600 円
		オーストラリア電子ビザ	540 円
		空港から宿泊施設までの交通費	3,400 円
		宿泊費,食費	107,250 円
日本国内交通費(往復)		16,320 円	
	上記のうち、250,000円を本助成金より 支払いいたしました。		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回、京大財団に助成金をいただき、動物行動学の大きな学会に参加し発表を行うことができました。この助成金がなければ、学会に参加すること自体かなわなかったため、学会で有意義な時間が過ごせましたこと、感謝いたします。		

このたびは、京都大学教育研究振興財団の国際研究集会発表助成・若手(Ⅱ期)の助成金をいただき、8月9日から14日の間開かれた第34回国際動物行動学会議2015年大会(Behaviour 2015)へ参加することができた。学会は、オーストラリアクイーンズランド州のケアンズで開かれた。発表演題数は、口頭発表が590件、ポスター発表が313件の大きい学会であり、会場となったケアンズ・コンベンションセンターは、半円型のホールと9つのミーティングルームを持つ大きな会場であった。

私は、霊長類の尾長の進化に関する研究を形態学と行動学の面から研究している。今回の発表は、“Tails of Macaques: similar length but different movement? Focusing on Rhesus (*Macaca mulatta*), Northern pig-tailed (*M. leonina*) and Assamese (*M. assamensis*)” 「マカクの尾は同程度の長さでも動きが異なるか? アカゲザル、キタブタオザル、アッサムモンキーの比較」と題しポスター発表を行った。発表内容は、同程度の相対尾長を持つ3種のマカクザルを対象に、タイ王国の生息地で尾の動きとその時の位置的行動を比較し、3種の差を示したものである。尾椎の数や長さがそれぞれ異なるこれらの3種は、最大背屈角が互いに異なり、また社会的地位を示すシグナルとなる尾の位置の違いについても示唆した。

ポスター発表のコアタイムは、11日と12日に設定されており、私は11日であった。前日の10日に、1分間スピーチを行った。1分間スピーチは、学会申込み時の希望性でポスターを宣伝するために発表者が手短かに自分の研究内容を話すものであり、10日と11日でそれぞれ30人程度が行った。11日の発表時は、2時間のコアタイム中10人以上が私のポスターを見に来てくれた。「1分間スピーチを聞いて来た」という人が数多くいて、1分間スピーチはプレリミナリー講演の直後に設定されており、プレリミナリーでは、毎日著名な研究者が講演していたため、多くの人に自分のポスターをアピールするいい機会であった。

尾の位置と行動の関連についての研究は、興味を持ってくれる人が多く、今後の考察を発展させる上で、有意義なコメントももらえた。動物行動学では、形態学的視点から研究を行っている研究者はあまり多くなく、そのため報告者と同じ分野の研究者に大勢会うということにはなかった。しかしながら、発表を聞きに来てくれたほかの研究者に、尾の動かし方と尾椎の関係を説明したところ、納得してくれる様子であった。

Behaviourの学会は2年に1度開催されるもので、対象種は哺乳類にとどまらず、動物界全般であった。報告者はこれまで、霊長類と哺乳類に限定された学会しか参加したことがなかったため、今回は幅広い動物に関する発表を聞くことができ、大変面白かった。特に印象深かった研究は次の通りだ。イカ・タコ腕、カメレオンの舌、ゾウの鼻に共通する筋肉の収縮について、解剖学的発表を行ったWilliam M. Kier氏の発表は、分かりやすい図と映像を用いて効果的に発表をしていた。またGadi Katzir氏のカメレオンの視覚に関する発表は、これまで左右独立して目を動かしているという定説に、餌をとるときは両眼視しているということを示し、ユニークな実験の様子を映像で見せ多くの聴衆の注目を集めていた。

発表を終えて、動物行動学の学会でも研究内容が通用したという実感が得られたので、論文の執筆に力を注ぐことにする。

謝辞

貴財団に助成していただき、今回大変有意義な成果を得ることができた。深く感謝いたします。